
金屋子の隠れ里山

戸次葵楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金屋子の隠れ里山

【Nコード】

N3819BA

【作者名】

戸次葵楓

【あらすじ】

金屋子神の住まう、とある隠れた集落のお話。

この地に長く受け継がれてきた祭りに参加する大学生のひと夏。

金屋子神をはじめとして里山の生命に触れ、

里山のありかたを考える、そんな話となっております。

とある隠れ里にて

『せやつたら今年の祭りは中止せなあかなあ』

簡素な木造の作業場で妙齡の黒髪長き女性が跪いている高齡の男性へ話しかけていた。

女性は純白の装束を纏い、その腰までかかる髪は首ほどの高さで朱の紐によりまとめられていた。

老人の方は灰色の汚れた作務衣を着て、そのところどころには補修の跡も見られた。

「申し訳ありません、わしの不注意がいけんのでがんす」
老人は後ろで束ねた白髪が天を指すくらいに頭を下げた。

少し高めに設けられた窓から明朝の光が差し込み、女性の影を土の床の上に映し出した。

女性は踵を返し老人に背を向けた。背丈もさほど高くない女性に老人が頭を下げる、異様な光景であった。

女性はその小さな口を小さく動かした。仕方ない、哀しいことだが健之助ももう若うないからな、そう言つて女性は高い屋根を見上げた。

『帰つて休んでええで。養生してもらわんと』

振り返ることなく女性は言った。

「なら、にがりますけえ、うちんかたへいぬらせてもらいます」

老人はよいしょと立ち上がり、一礼をして作業場を後にした。

ふう。

一つため息をついた女性はその場で立つたままだった。

『火を絶やすか、それとも代わりを急遽…か。こりやなんぎやな』
女性は窓の外に眼をやった。

そこには桂の木が雄々しく空へその腕を広げていた。

とある隠れ里にて（後書き）

ご閲覧賜りありがとうございます。
拙文にて申し訳ありません。

今回はプロローグ、といいますが。

物語の導入にあたります。このシーンだけでは意味不明だと思われるが、

少々辛抱くださるようお願い申し上げます。

なお、タイトルにあります金屋子とは製鉄の神である金屋子神のこととあります。

詳しいことはご自身にて調べられたほうが正確かと存じます。

この物語では金屋子神を以下の設定として扱わせていただきます。

？妙齡の女性の姿

？大阪弁

？死の穢れはやや好みます

？麻や犬は大丈夫です。藤・みかんが特に好きということはありません。

？可愛い女性は嫌いじゃないそうです。

以上、実際の神話とは少し異なる性格を含みます、申し訳ありません。

上記設定に関してのご意見や、にわか広島弁の批判・訂正などがありましたら、

メッセージをいただくと大変ありがたく存じます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3819ba/>

金屋子の隠れ里山

2012年1月9日22時46分発行